

# 龍門石窟 破壊前の姿を探る

## 京大人文研 90年の学知

⑥ 向井佑介 (考古学)



むかい・ゆうすけ 1979年兵庫県生まれ。京都大学大学院博士課程中退、京都府立大学准教授などを経て、2017年から京大人文科学研究所准教授。専門は中国考古学。共著「京都大学人文科学研究所蔵 華北交通写真資料集成」、訳書「埋もれた中国王代の海昏侯国」などがある。

中国を代表する古都・洛陽の南郊外に、龍門石窟はある。北の雲岡石窟、西の敦煌莫高窟とならんで三大石窟と呼ばれ、2000年にはユネスコの世界遺産にも加えられた。北魏が洛陽を都とした時代(494-534年)に造営が始まり、唐代(618-907年)にも則天武后が発願した盧舎那大仏をはじめ多数の仏像が彫刻された。これまでに確認された洞窟は2345か所、仏像の数は10万体を超える。

893年、岡倉は弟子の早崎稷吉とともに中国各地を周遊して洛陽龍門へと至り、そこで止利法師の様式に似た仏像を発見し、北魏のものか」と旅行記に書きとめた。それ以後100年あまりにわたって、龍門の北魏様式は飛鳥仏の源流として日本人の意識に深く刻まれていくこととなる。

近代に日本の美術史家として初めて龍門石窟を訪れ、その価値を見いだしたのは、岡倉天心であった。1

龍門石窟古陽洞 壁面を埋め尽くす北魏時代の彫刻(2018年撮影)

20世紀初頭には、建築史家の伊東忠太、関野貞、フランスの東洋学者シャヴァンヌらが相次いで龍門石窟の調査を試みた。こうして世界的に龍門石窟への関心が高まるなか、東方文化学院京都研究所(京大人文研の前身)の水野清一と長廣敏雄が1936年に現地を調査し、その成果は5年後に『龍門石窟の研究』と題して出版された。わずか6日間の調査にもかかわらず、報告書では多数の図版的確な解説と長編の論考が加えられ、銘文の網羅的な集成もなされた。刊行後80年ちかく経過した

## 拓本と古写真から銘文を読解

現在も、学術資料として高く評価されている。

水野らの調査以前、1920年代に龍門石窟では大量の彫刻が剥ぎ取られ、美術商を介して海外に流出し、世界各地の美術館や愛好家の手にわたった。中国には戦前の古い写真が少なく、海外の書籍に掲載された若干の写真から破壊前の原状をさぐることはできない。

これに対し、人文研には水野らの調査資料だけでなく、早崎稷吉の写真原板をはじめ1920年代以前の写真資料も集積されている。また、かつて東洋史家の内藤湖南や仏教学者の松本文三郎らが収集した拓本も人文研に収蔵され、一部は付属東アジア人文情報学研究所のデータベースで公開されている。それらの収蔵量は世界有数であり、日常的にこれだけ豊富な資料にアクセスできる環境は、中国にもない。

私たちは、2016年に龍門拓本の優品を集めた「龍門二十品」の整理に着手し、翌年から共同研究「龍門北朝窟の造像と造像記」(班長・稲本泰生)を立ちあげ、拓本と写真をもとに銘文の再検討を進めてきた。月2回のペースで研究会を開催する共同研究室は、80年前に水野ら

が龍門石窟の資料を整理した部屋と同じである。その小さな共同研究室に、考古学・美術史学・仏教史学など諸分野の専門家が集まり、毎回3時間、休憩なしで拓本と写真をにらみながら議論を繰り返している。それにより、これまで所在不明だった銘文の位置を特定でき、また銘文の読み方や意味、銘文と仏像との対応関係も、いつそう明確になってきた。

その研究資料や成果に対しては、海外の研究者も大きな関心を寄せている。昨年度には龍門石窟研究院の研究者を客員教員として招き、互いの研究成果を報告するなど、交流を深めた。今後は共同研究の成果を報告書として出版するだけでなく、その研究資源に対して国内外の研究者がアクセスしやすい環境を整えていく必要があるだろう。

近代の歴史は、龍門石窟に大きな傷跡を残し、流出文化財の問題はお未解決のままである。私たちができるのは、破壊以前の状態を記録した資料を提供することであり、また共同研究のなかでそれらの資料を丁寧に読み解き、新たな解釈の可能性を提示することである。資料を囲み込むのではなく、それを可能な限り整理して研究成果を公開していくことが、90年の歴史をもつ研究所の責任と使命なのではないだろうか。(寄稿) 毎月第3木曜に掲載します



龍門石窟古陽洞北壁。早崎稷吉が撮影していた剥ぎ取り前の写真(20世紀初め)



龍門石窟古陽洞北壁(2018年撮影) 上段の菩薩頭部や脚下の彫刻、下段左側の銘文などが剥ぎ取られている